

まず、演題6では、長大の福田らは過去9年間に施行した約2,000例の肺スキャンを検討し、38例に片肺血流欠損例を経験したが、その大半が肺または縦隔腫瘍であったと述べ、肺血流異常の早期の検出における肺血流スキャンの有用性を述べた。

演題7では、鹿大の坂田らは原発性肺癌における²⁰¹Tlの集積の程度を気管支動脈造影およびMMC one shot動注による効果と比較検討し、²⁰¹Tlの集積の程度はvascularityと動注効果と正の相関関係にあり、²⁰¹Tlスキャンはone shot動注の適応を決める上で有用であると述べた。

演題8では、九大の塩崎らはmalignant lymphomaの患者の骨シンチで検出し得たまれなperirenal urinary extravasationの症例を供覧し、骨シンチ時の腎の異常の有無に注意を払う必要性を強調した。

9. 肝・胆管系スキャン剤の開発

前田 辰夫 加留部善晴 河野 彬
大矢 雅人 (九州がんセンター)

^{99m}Tc標識体を下記のごとく合成し、家兎における体内動態をしらべた。配位子はエチレン・ジアミン-N, N-ジ酢酸(EDDA)と芳香族スルホン酸クロリドまたは芳香族クロリドとの縮合体を用いた。

- (1) N-(benzenesulfonyl) ethylenediamine-N', N'-diacetic acid
- (2) N-(p-chlorobenzenesulfonyl) EDDA
- (3) N-(p-toluenesulfonyl) EDDA
- (4) N-(p-propylbenzenesulfonyl) EDDA
- (5) N-(2,5-dimethylbenzenesulfonyl) EDDA
- (6) N-(naphthalene-2-sulfonyl) EDDA
- (7) N-benzoyl-EDDA
- (8) N-(p-t-butylbenzoyl) EDDA

いずれも胆管系からの排泄がみられたが、スルフォンアミド型の方がすぐれており、特に(3)はE-HIDAよりもすぐれた結果を示した。これらは安定でキット化も可能である。

10. ^{99m}Tc-phytate 肝 Scan における早期像の視覚化について

矢野 潔 古賀 尚充 (県立柳川・放)

肝 Scan において早期の血流 Scan を観察することは

診断上重要なことで、臨床的にも観察されているが、多くの場合 ROI による Counts 数の変化として表現されている。あるいは画像としても表現されているが、血流を含む早期像は、長くても10秒間隔での撮影が必要であるため時間が短く、従って十分な Counts 数が得られず、視覚的に十分に観察できる像が得られていない。われわれは、早期像と static image とを重ね合わせることによって、早期の特徴を示し十分に視覚的に観察できる早期像を作ることができたので報告する。

11. びまん性肝疾患のスキャンの検討

島袋 國定 倉内 末男 (県立大分・放)
楠本 征夫 (同・2内)

腹腔鏡下肝生検にて組織診の得られたびまん性肝疾患52症例のスキャン所見を検討した。そのうち、¹⁹⁸Au-コロイド使用例は36例、^{99m}Tc-スズコロイド使用例は16例であった。

正常例の検討および文献を利用して、肝右幅径と左幅径、肝と脾の RI カウント比、脾長径、骨髄描画の有無、という4項目についての判定基準をおのおの設定した。

検討の結果、4項目を総合してみると¹⁹⁸Au-コロイド使用例と^{99m}Tc-スズコロイド使用例との間に異常所見出現頻度の差はなかった。また、疾患別には、肝硬変症は特異的所見を示す症例が多かったが、他のびまん性肝疾患では異常所見出現頻度は低く、特徴的なスキャン所見も見出し得なかった。

肝と脾の RI カウント比については、正常例の検討の結果より、判定基準を設定したが、^{99m}Tc-スズコロイドでの脾の評価に有意義であるように思われた。

12. ^{99m}Tc-Microsphere albumin による肝シンチグラフィ—^{99m}Tc-phytate との対比検討

一矢 有一 駕海 良彦 鴨井 逸馬
平田 秀紀 塩崎 宏 松浦 啓一

(九大・放)

各種肝疾患例、35例に対して、^{99m}Tc-phytate と^{99m}Tc-microsphere albumin (粒子サイズ 0.5μ以下、milli MISA と略)の両方による肝シンチを行ない、両者の比較により^{99m}Tc-milli MISA 肝シンチの特徴を検討した。

その結果、